ゆうことみゆきの
なるほど
アイヌ文化エッセイ

ソンコ de ソンコ

Vol.152

アイヌ文化のことをもっともっと話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で
執筆するソンコ(=お便り)形式のエッセイです。

今月のテーマ

エヤミ(カケス)

村木美幸(アイヌ民族文化財団副理事長)

エアミカ(カケス罠)を紹介する国立アイヌ民族博物館の触れる展示「探究展示テンパテンパ」。自分で罠を組み立てられるので、その仕組みやカケスの習性などを楽しく学ぶことができる人気の展示のひとつになっています。

カラスの仲間であるカケスは、ヨーロッパからアジアの広い範囲に生息する留鳥(りゅうちょう)。北海道に生息するミヤマカケスは、頭部が黄褐色で頭頂部に黒い縦斑がみられ、羽の一部に青と黒の縞模様が特徴。ハトと同じ位の大きさで、「ジェージェー」としわがれた声で鳴きますが、まね上手な鳥で、フクロウやウグイスなどの鳥の鳴き声、時には人の話し声までもまねるといいます。

カケスはパラケウカムイ、雄弁なカムイ(神)として知られています。村の守り神であるシマフクロウの話に、人間の行いの悪さから獲物を授けるカムイが怒って人間の世界に食べものを降ろさなくなり飢饉に…。人間が困っていても、見て見ぬふりをするカムイを説得するため、シマフクロウがカラスにその役を頼むも、途中で動かなくなる。次にカケスに依頼。カケスは、下方の天界、上方の天界、六つの天界を突き抜け、カムイの家の上座の窓から入り、伝言を伝えたが聞き入れてもらえない。カケスが、「…神だけが食事をしている。人間の村は、大飢饉になっているとシマフクロウの神が伝令の使命を私に与えたが、獲物を授ける神が…、何に立腹して、その顔つきに厳をもつようにしているのか…」などと家中を飛び回り諭したり、持ち上げたりと丁寧に説得したことで飢饉が解消されたという話。シマフクロウの神は「おまえはキロロコロ(気力.体力を持つ)で鳥の中で一番のチャウェトッコロペ(雄弁者)だ」と褒め称えたとのこと。

イラスト/山丸ケニ

カケスとカラスの話は他にも。「…六つの酒樽を上座に、六つの酒樽を下座に据えて大勢の神を招待…、宴もたけなわになったとき、カケスの神が外へ出てドングリをくわえて来て、二つの舞を、三つの踊りを重ねながら酒樽に近づいて樽の中にポトンと入れたので大笑いになる。それを見ていたカラスの神が同じようにして、大きい糞のかたまりをくわえて来て酒樽に入れたので大騒ぎに…。カラスの神は切り殺されて外へ捨てられた…」と、カケスは成功して、カラスは失敗するお話。まるで花さか爺さんやこぶとり爺さんの話のようですね。 Ⓙ

次回のテーマは「ウパシ」
本田優子(札幌大学教授)が担当します。

ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間
JR白老駅から徒歩約10分

ウポポイPRキャラクター
「トゥレッポん」

イランカラプテ
「こんにちは」からはじめよう。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団副理事長。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■山丸ケニ(やまるけに):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団職員。ウポポイでアイヌ語体験プログラムを担当する。